

『東アジア 遭遇する知と日本： トランスナショナルな思想史の試み』

桂島宣弘*・長志珠絵**・金津日出美***・沈熙燦****編、文理閣、2019 年

佐々 充 昭†

本書の冒頭である序論において、編者の桂島氏はナショナル・ヒストリーを超えたグローバル・ヒストリーの可能性を指摘しながらも、その実践の重要性について次のように述べている。「歴史をグローバルな視点から捉え直すためには、自らの専門分野（大方は一国史の枠組みに閉じ込められている場合が多い）に加え、文字どおり国境を越えた同時代的・共時的現象への幅広い洞察が求められており、到底一人の研究者〔や〕……ナショナルリティを同じくする者のみで行いうるものではない。ナショナル・ヒストリーの寄せ集めではないという意味での世界史的地平から現象・思想を捉えるためには、文字どおり国境をまたいでの数多くの研究者との共同研究が目指されなければならない」（序論、4-5 頁）。

まさに「宣言」とも言えるようなこのような表明を実践するために、桂島氏は 2005 年以来、立命館大学を中心に東アジア思想文化研究会を組織し、日本・中国・韓国・台湾の研究者を招きながらほぼ月 1 回の研究会を開催してきた。また課題に応じて、『朝鮮史』研究会（2007～2010 年）、東アジア史学思想史研究会（2014～2018 年）を組織し、適宜、研究会やシンポジウムを開催しながら、その成果を『東アジアの思想と文化』や『季刊日本思想史』などを通じて公刊してきた（序論、5 頁）。本書はこうした研究成果の上にまとめられたものであり、東アジア思想文化研究会の活動に参加した若手研究者を中心とする 19 人の研究論文を収録したものである。本書は全体で 4 部にわかれており、序文のほかに 19 章で構成されている。以下では、本書に収録された各論文の概要についてまとめてみたい。

第一部は「総論」と題され、韓国と中国の研究者の観点から「東アジア」の過去・現在・未来についての論説が収録されている。

第 1 章の尹海東論文「“東アジア”：どのようにみるべきか、どのように作っていくべきか」では、朝貢－冊封を背景とする前近代の「中華秩序」と、朝鮮・日本・越南・琉球にみられる小中華思想、

* 立命館大学文学部教授

** 神戸大学大学院国際文化学研究科教授

*** 立命館大学文学部准教授

**** 韓国延世大学校近代韓国学研究所 HK 教授

† 立命館大学文学部教授

sassa35@lt.ritsumei.ac.jp

そして近代以降に日本が構築しようとした「大東亜共栄圏」の挫折といった歴史を概観した後、国民国家と地域主義の立場を乗り越えて「下からの東アジア」を志しながら東アジア市民社会を形成し、「開かれた東アジア共同体」を作っていくべきであると論じる。そして葛藤の記憶より和解を呼び起こすための「東アジア記憶共同体」を作っていくことが、平和的な東アジア共同体の柱になると提案している。

第2章の張世真論文「ライシャワー（Edwin O. Reischauer）と戦後アメリカの地域研究：韓国学の位置を考える」では、東アジア学（East Asian studies）という学問が米ソの冷戦体制を背景にアメリカの地域研究の中で成立したことを念頭におきながら、ハーバード大学極東言語学科の日本史教授だったライシャワーが、同大学東アジア学センターに韓国学関係講座を新設した過程について考察している。『東洋文化史』（1960年代シリーズ本）のナラティヴを深層的に分析し、ライシャワーが駐日大使に任命され韓国の朴正熙政権と日韓国交正常化をなした現実政治との関わりについて論じられている。

第3章の安相憲論文「グローバル時代における哲学言説と人文学」では、まずグローバル資本主義の現実根付いた21世紀哲学言説の特徴について述べる。新自由主義的な市場論理のもとに超国籍資本が主導する「単一世界市場体制」が成立し、社会主義圏が崩壊したが、いまやアメリカを中心とするグローバル資本主義は根本的な矛盾を抱える。大学教育においても「人文学の商品化、商品としての価値の水準向上と開発」に応じる方向へ進んでいる。このような時代だからこそ抵抗的人文学、「否定の否定」の弁証法を徹底して行う「人文学的根本主義」の回復が切実に要請されていると論じる。

第4章の張憲生論文「近代中国知識人の『東方』：晩年梁啓超の思想的転回を例に」では、近代中国知識人の「東方」認識を考察するために、梁啓超の晩年における思想的転回について考察している。梁啓超は青年期に発表した『新大陸遊記』（1903年）で、中国社会の欠点を批判しているが、その後、近代ヨーロッパの病根が社会進化論と個人主義と科学万能思想にあると考えるようになる。そして『欧遊心影録』（1920年）では「中国人の自覚」という章を設け、「東方」と「西洋」を止揚した新しい文明をつくる「世界主義的国家」中国の使命について論じたことが詳述されている。

第二部は「近世思想史研究の新視点」と題して、5本の論文が収録されている。

第5章の石運論文「十八世紀中期の儒学研究と明代学術の受容」では、明清代学術史への理解というトランスナショナルな視点から近世日本の儒学思想史について再検討を行っている。荻生徂徠以降～宝暦期までを対象に、仁斎・徂徠を批判した高志泉溟や徂徠学を批判した服部蘇門の思想をとりあげつつ、彼らの「反徂徠」は明代学術への「反芻」であったと論じ、明清思想史に対する意欲的関心という視点から従来の日本思想史研究で看過されてきた18世紀中期という時代の再評価を促している。

第6章の松川雅信論文「近世日本の儒教儀礼と儒者：『東アジア思想史』のための試論的考察」では、閩齋学派による朱熹『家礼』への取り組みを検討し、近世日本儒学における「儒礼（儒教儀礼）」の不在という通説に見直しを迫る。『家礼』喪祭礼へ傾注した山崎闇斎の高弟・浅見綱斎や最末期の細野要斎の事例、および寺壇制が確立した18世紀中葉以後、儒仏混淆的な儒礼実践を提唱した尾張崎門派・中村習斎の『家礼』実践を分析しながら、儒礼が東アジアで広く展開されていた実態を解明している。

第7章の田中俊亮論文「前期水戸学における神器論の波紋：栗山潜鋒の諸言表をめぐる」では、

栗山潜鋒の『保健大記』による神器正統論が、後に続く三宅観瀾の『中興鑑言』と安積澹泊の『大日本史賛藪』においてどのように読み込まれたのか分析する。潜鋒による「自若としての神器」という言表に対して、観瀾と澹泊は、中国王朝に「伝国璽」を批判的に措定することと相関的に、日本に「神霊としての神器」を措定することで、「正統」「皇統」という一連の言説編成へ導いたことを論じている。

第8章の松本智也論文「一八世紀対馬における『藩』言説：朝鮮における対馬『藩屏』認識言説との交錯を通じて」では、対馬藩内における自己認識の土台をつくった陶山訥庵や、朝鮮語・中国語に通じ対馬の対朝鮮外交に尽力した雨森芳洲、さらには芳洲の推薦で朝鮮方真文役として対馬藩に仕えた松浦霞沼の記録を検討しながら、「朝鮮の藩屏」とみなす朝鮮側の言説に対する否定形として「日本の藩屏」言説が主張され、それがさらに徳川幕藩体制への適合に結びついていったことが論じられている。

第9章の向静静論文「吉益東洞の医学思想の再検討：『万病一毒』論を中心に」では、江戸時代に勃興した古方派医学の泰斗とされ、陰陽医・仙家医を批判して己を「疾医」と位置づけた、吉益東洞の医学思想に対する検討が行われている。東洞が生きた18世紀の疾病構造、および東洞の治験録に示された疾病事例を解説しながら、とくに『呂氏春秋』『毒鬱』論から「万病一毒」論を得、『傷寒論』から「万病一毒」の「治法」を獲得し、実際に「親試実験」を通じて疾病治療を行った事実が考察されている。

第三部は「変容する知と移動」と題して、5本の論文が収録されている。

第10章の許智香論文「京城帝国大学法文学部の哲学関連講座をめぐる問題提起：帝国大学との関連性を重視して」では、植民地朝鮮における唯一の官立大学であった京城帝国大学の哲学関連講座について、その全体像を示した上で、講座担任教授、助教授、設置科目について考察している。その結果、教員のほぼ全員が東京帝大出身であること、担当講座が必ずしも自己の専攻と一致しないこと、ほとんどが朝鮮と関連性のない学問的履歴をもつことなど、帝国大学との連動性の実態が明らかにされている。

第11章の沈熙燦論文「近代歴史学と脱植民地主義：植民地朝鮮における『正史』編纂の試み」では、「日鮮同祖論」を主旨とする1915年の『朝鮮半島史』編纂企図、三・一運動の影響による編纂方針の転換、1925年『朝鮮史』編纂事業の開始と、黒板勝美ら東京帝大史料編纂掛の手法の本格的導入といった朝鮮正史編纂の流れを考察しながら、被植民者の認識論的抵抗の試みとして、不成文化論を提唱して壇君神話を朝鮮正史に編み込むことを主張した崔南善の朝鮮学について論じている。

第12章の長志珠絵論文「史料蒐集と〈植民地〉：『朝鮮史』史料採訪『復命書』を中心に」では、朝鮮史編纂委員会が作成した史料採訪の公文書史料である「復命書」をテキストとして、史料の「発見」と「蒐集」の現場に働く帝国日本の歴史構築のポリティクスを批判的に論じている。史料蒐集を行う側と史料を所蔵する側との関係は、植民地の支配被支配に加え、官・民という権力関係の磁場が働く構造にある一方、植民地側の能動的な情報提供拒否など抵抗の事例も豊富にあることが示されている。

第13章の青柳周一論文「近代沖縄の内地修学旅行記録を読む：1910年『三府十六県巡覧記』について」では、1910年に沖縄県師範学校が実施した内地への修学旅行に参加した生徒・前原信明の日記である『三府十六県巡覧記』を読み込みながら、彼が体験した内地と沖縄との圧倒的な格差につ

いて述べている。特に東京の博物館などで他府県人から「ある意味のストレンジャー視」を受け、内観的傾向や自己省察について経験させる機会となったことの社会的意味について再考を促している。

第14章の朝井佐智子論文「須永元をめぐる朝鮮人亡命者支援：甲申政変関係者について」では、19世紀末に日本へ亡命した多数の朝鮮人運動家を支援したことで知られる須永元について、甲申政変後に日本へ亡命した鄭蘭教への支援について明らかにしている。鄭蘭教は「須永元日記」に数多く登場する人物であるが、今まで詳細な研究は行われてこなかった。金玉均や朴泳孝への支援と関連づけながら、「日韓融和の一助」を目的とした鄭蘭教との交流の姿が描かれている。

第四部は「宗教／知識／権力」と題して、5本の論文が収録されている。

第15章の石原和論文「1920年代後半における『如来教』の“創出”：石橋智信の研究から」では、姉崎正治の後を継いで東京帝国大学宗教学講座二代教授となった石橋智信の如来教研究について考察している。自らキリスト教を信仰し、ドイツに留学して宗教学・旧約学を学んだ経歴をもつ石橋が、メシア論などをもとにキリスト教に比定しながら「如来教」像を創出していった過程を分析し、近代民衆宗教と学問（東京帝国大学宗教学講座）が密接な関係を築いていたことを論証している。

第16章の裴貴得論文「植民地期朝鮮キリスト教会の『自立』をめぐる諸相：1930年代の神社参拝拒否問題と『自立』」では、ネヴィウス宣教政策によって実施された朝鮮キリスト教の「自立」が1910年代の海外伝道へ繋がった一方で、1930年代の朝鮮総督府による神社参拝強制によって新たな局面を迎え、経営権譲渡運動の展開から西欧宣教師批判へと拡大され、さらには「朝鮮的なキリスト教」の必要性を説く精神的独立へとその論理を発展させていった様相が明らかにされている。

第17章の朴海仙論文「植民地朝鮮の新宗教と日本仏教：新都内の真宗同朋教会と金剛大道を中心に」では、金剛大道の前身である信仰共同体が1910年に忠清南道鷄龍山下の新都内に移住した後、1922年に真宗同朋教会に帰属し、さらに数年間続いた弟子たちの内紛の末に1926年に同朋教会と決別して翌年に金剛大道と改名する経緯について考察しながら、日本仏教との緊張関係や葛藤を通じてアイデンティティを確立していった植民地期朝鮮における新宗教の様相を描き出している。

第18章の佐藤太久磨論文「『民族心理（学）』と植民統治権力の弁証：東郷実小論」では、植民地台湾の総督府官僚を経験する一方、ドイツ留学を経て代議士として活動した東郷実の植民地統治理論について、「民族心理（学）」と「分化政策」という二つの概念を用いて考察している。帝国の民族構成員を特別な「民族精神」の保持者として最大限肯定する東郷の植民政策が、如何にして「大日本主義」言説と融合し「大東亜共栄圏」といった帝国日本最末期の国是へと結びついていったのかについて論じられている。

第19章の富山仁貴論文「戦後京都における国民教育論の展開と『丹後の教育』の発見」では、戦後日本における国民教育論の展開について考察を行っている。「国民教育」は日教組にとって労働運動と教育運動とを取り結ぶ役割を持った言葉であり、京都では京都教職員組合が京都教育センターを設立し、国民教育論に媒介された研究・実践・運動の一拠点となった。京都教育センターによる活動を通じて1960年代後半に丹後の僻地教育実践や文化運動が「発見」されたことが論じられている。

以上に述べたように、本書は中国・朝鮮・日本を中心とする東アジアを対象に、近世から近代・現代に及ぶまで多様な視点や問題意識のもとに書かれた論文が収録されており、本書を一読した読者は、文字どおり東アジア思想史の分野で議論されている「知」の多様性に「遭遇」することがで

きる内容となっている。

本書の「あとがき」の中で、編集委員として本書を企画した沈熙燦、金津日出美、長志珠絵氏は、今日の東アジアにおいて益々高まっていく「排他的な国民国家の境界を相対化し、協力と交流を通じた相互理解の深化を支えていく『新しい東アジア論』の展開に役立つことができれば幸いである」と述べているが（368頁）、トランスナショナルな思想史を「実践」した本書の試みは、まさしくそれに十分に応えるものであると言えるだろう。